

宮内官僚が残した第一級資料 保阪正康

昭和天皇の本意を確認するには、勅語の分析、御製の解釈、実録の検証、そして側近たちの日記や回想記の熟読などが必要である。とくに重要なのは、天皇周辺に身を置いて日々の動きを見つめ、それを書き残した記録文書である。「木戸幸二日記」「牧野伸顕日記」などはその点で第一級資料である。しかし本当のところ、より重要なのはこうした第一級資料と同様の役割を果たしている宮内官僚の日記である。彼らが抱つて立つ目の位置や上級者を補佐する日々の動きの中に昭和天皇の心理を読みとく鍵があるように思う。

関屋貞三郎は、昭和のもっとも重要な前期に宮内次官の職にあり、日記にはその見聞が忠実に記述されている。大正十年三月から昭和八年二月までの期間は宮内次官、それからは貴族院勅選議員として敗戦までその職にあった関屋は、元老西園寺公望や宮内大臣、内大臣を務めた牧野伸顕らとの交流も篤く、そして考え方も共通する点が多かった。その点では、近代日本の天皇の実像が、立憲君主制の枠組にあった何よりの証がこの日記からは十分に窺われてくるはずである。昭和天皇の実像はこの人脈によってつくられたという意味で、本書はまさに歴史の遺産といつていいであろう。

(ほさかまさやすノフイクション作家)



本書の特色

- 1 本書は関屋貞三郎が書き記した日記のうち、一九二六年から一九四六年分と、一九五〇年分の計二二年分を読みやすく翻刻したものである。関屋の独特な崩し字から研究者の間でも限定的な使用にとどまっていた日記が本書によって通読可能となった。
- 2 大正期から昭和戦前期の長きにわたって、宮内次官、貴族院議員を務め、戦後には枢密顧問官として憲法改正作業にも携わった関屋は、業務や国内外の出来事に関する情報を日記に書き留めていた。本書と既刊の資料を比較検証することにより、より詳しい宮中、貴族院、枢密院の動向をうかがい知ることができ、
- 3 宮内次官時代については関屋の周囲にいた側近、牧野伸顕、河井弥八、岡部長景、奈良武次らの日記や関係文書と関連づけて読み解くことで、当時の宮中内部の状況をより詳しく理解することができる。
- 4 貴族院議員時代は日本が日中戦争からアジア・太平洋戦争へと戦争の道を突き進む時期に相当し、日記に記された関屋の心境から当時の世相をうかがい知ることができる。
- 5 戦後の枢密顧問官時代の日記からは、関屋が当事者として深くかかわっていた天皇制の存亡や昭和天皇の戦争責任問題に揺れる国内の状況をうかがい知ることができる。
- 6 関東都督府や朝鮮総督府での勤務歴がある関屋は、植民地、とくに朝鮮への思い入れが強かった。日記のなかでも朝鮮統治に関する持論などが散見される。また、妻の衣子を通じてキリスト教関係者とのつながりもあり、社会事業や慈善事業に関する情報も盛り込まれている。
- 7 美術に造詣が深かった関屋の日記には、著名な画家や陶工との交友や、院展や文展に関する記述が散見され、当時の美術界の状況がうかがえる。
- 8 第一巻には、関屋と公私にわたってつながりの深かった牧野伸顕の関屋宛書簡のうち、国立国会図書館憲政資料室所蔵分を翻刻して収録した。
- 9 各巻ごとに人名索引を付し、第四巻には総人名索引を付した。

関屋貞三郎日記 全4巻

二〇一八年六月二十五日刊行開始
以降、巻数順に二年毎に配本予定

【第一回配本】

第一巻

大正一五年／昭和元年（一九二六）～昭和五年（一九三〇）

関屋貞三郎宛牧野伸顕書簡

定価：本体一八、〇〇〇円＋税

ISBN978-4-336-06271-0

【造本・体裁】

A5判（二一〇×二四八）・上製クロス装・貼函入

各巻平均五〇〇頁

本文組Ⅱ 二・Q 二段組

日本近現代史研究に新たな光をあてる第一級史料、刊行開始！

日本近現代史研究の 深化に大きく貢献

古川隆久

関屋貞三郎は、裕仁皇太子が摂政となり、やがて昭和天皇となって政治の荒波にもまれはじめる時期に宮中で昭和天皇を支えた人々の一人である。今回刊行される「関屋貞三郎日記」のうち、宮内次官時代の部分には、宮中有力者や皇族たちの動向や肉声に記され、貴族院議員（勅選）時代の部分には、彼が属した院内会派研究会、なかでも勅選議員たちの動きが記されている。さらに、全体を通じて、彼が職歴上関与した諸団体（朝鮮協会、国際連盟協会、愛育会、その他）の動きや政治外交への関心の持ち方、交友関係もうかがうことができる。他の昭和天皇側近や貴族院議員の日記、関屋自身の活字化された文章などと突き合わせることで、昭和期における宮中や貴族院の政治史的研究の深化に大きく貢献することはまちがいない。さらに、美術展観覧についての記事も多く、美術史の史料としても有用である。判読しにくい文字で書かれた本日記の翻刻が日本近現代史研究に資すること、きわめて大といわなければならない。

(ふるかわたかひさ 日本大学文理学部教授)



国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 Tel 03-5970-7421 Fax 03-5970-7427 URL: <http://www.kokusho.co.jp> E-mail: info@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申 込 書	国書刊行会「関屋貞三郎日記 全4巻」を_____セット申し込みます。
	お名前 _____
	ご住所 _____
	お電話 _____ *必要事項をご記入のうえ、書店へお渡ください。

関屋貞三郎日記

全4巻

茶谷誠一 編

国書刊行会

刊行にあたって

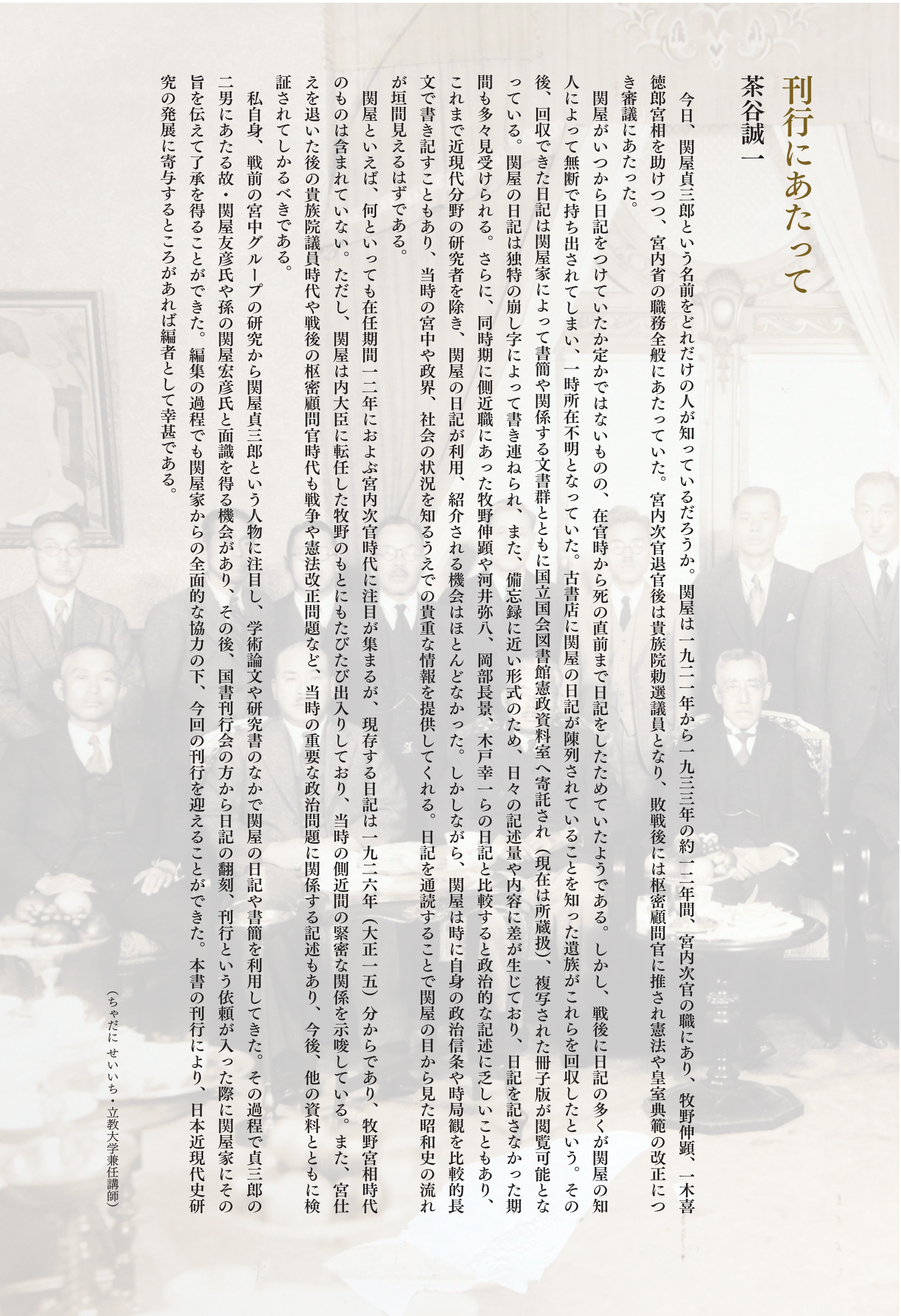
茶谷誠一

今日、関屋貞三郎という名前をどれだけの人を知っているだろうか。関屋は一九二一年から一九三三年の約十二年間、宮内次官の職にあり、牧野伸顕、一木喜徳郎宮相を助けつつ、宮内省の職務全般にあたっていた。宮内次官退官後は貴族院勅選議員となり、敗戦後には枢密顧問官に推され憲法や皇室典範の改正につき審議にあたった。

関屋がいつから日記をつけていたか定かではないものの、在官時から死の直前まで日記をしたためていたようである。しかし、戦後に日記の多くが関屋の知人によって無断で持ち出されてしまい、一時所在不明となっていた。古書店に関屋の日記が陳列されていることを知った遺族がこれらを回収したという。その後、回収できた日記は関屋家によって書簡や関係する文書群とともに国立国会図書館憲政資料室へ寄託され（現在は所蔵扱）、複写された冊子版が閲覧可能となっている。関屋の日記は独特の崩し字によって書き連ねられ、また、備忘録に近い形式のため、日々の記述量や内容に差が生じており、日記を記さなかった期間も多々見受けられる。さらに、同時期に側近職にあった牧野伸顕や河井弥八、岡部長景、木戸幸一らの日記と比較すると政治的な記述に乏しいこともあり、これまで近現代分野の研究者を除き、関屋の日記が利用、紹介される機会はほとんどなかった。しかしながら、関屋は時に自身の政治信条や時局観を比較的文で書き記すこともあり、当時の宮中や政界、社会の状況を知るうえでの貴重な情報を提供してくれる。日記を通読することで関屋の目から見た昭和史の流れが垣間見えるはずである。

関屋といえば、何といても在任期間一二年におよぶ宮内次官時代に注目が集まるが、現存する日記は一九二六年（大正一五）分からであり、牧野宮相時代のものは含まれていない。ただし、関屋は内大臣に転任した牧野のもとにもたびたび出入りしており、当時の側近間の緊密な関係を示唆している。また、宮仕えを退いた後の貴族院議員時代や戦後の枢密顧問官時代も戦争や憲法改正問題など、当時の重要な政治問題に関係する記述もあり、今後、他の資料とともに検証されてしかるべきである。

私自身、戦前の宮中グループの研究から関屋貞三郎という人物に注目し、学術論文や研究書のなかで関屋の日記や書簡を利用してきた。その過程で貞三郎の二男にあたる故・関屋友彦氏や孫の関屋宏彦氏と面識を得る機会があり、その後、国書刊行会の方から日記の翻刻、刊行という依頼が入った際に関屋家とその旨を伝えて了承を得ることができた。編集の過程でも関屋家からの全面的な協力の下、今回の刊行を迎えることができた。本書の刊行により、日本近現代史研究の発展に寄与するところがあれば編者として幸甚である。



（ちやだにせいいち・立教大学兼任講師）

戦中から戦後にかけて宮中は激動の時代にどのように対応したのか

明らかになる戦後の天皇制の存亡をめぐる攻防、憲法改正作業の内幕。

関屋貞三郎略年譜

- 一八七五年（明治八） 父は関屋長純、母は卯多。
- 一八九九年（明治三二） 東京帝国大学法科大学卒。内務属。
- 一九〇〇年（明治三三） 台湾総督府参事官となる。
- 一九〇三年（明治三六） 兼内務大臣秘書官。
- 一九〇四年（明治三七） 兼台湾総督秘書官（台湾総督は児玉源太郎）。
- 一九〇五年（明治三八） この頃、長田鉦太郎の娘次子と結婚。
- 一九〇六年（明治三九） 関東州民政事務官兼台湾総督府参事官となる。
- 一九〇八年（明治四一） 鹿児島県内務部長となる。
- 一九一〇年（明治四三） 朝鮮総督府内務部学務局長となる。
- 一九一七年（大正六） 兼朝鮮総督府中樞院書記官長。
- 一九一九年（大正八） 静岡県知事となる。
- 一九二一年（大正一〇） 宮内次官となる（宮内大臣は牧野伸顕）。
- 一九三三年（昭和八） 貴族院勅選議員となる。
- 一九三五年（昭和一〇） 日本銀行監事となる。
- 一九四六年（昭和二一） 枢密顧問官となる。
- 一九四七年（昭和二二） 憲法改正や皇室典範改正の審議にあたる。
- 一九五〇年（昭和二五） 枢密院廃止により退官。死去。



事情を語る。資本主義の弊といはんか、気の毒に至りなり。

【上欄】 關大札許談会（小範圍）を開く。之れて最終とす。西園寺（八世）車馬部長欠席。他は全部出席。南遊にて午餐後、左の事項を決定す。

- 一 大札使官制廃止の時期。一月五日。
- 一 残務整理。
- 一 大札記録。
- 一 建物其物品の処分。十四日。
- 一 写真粘調整。以上。

關院宮（兼仁親王）総才殿下に拝讀。言上。

【一月十二日（五）】 芳沢（謙三）支那公使を招き午餐を共にす。支那の真相を知り対支關係の益困難なるを思ふ（飄亭支店、C&O）。

關院宮（兼仁親王）總才殿下に拝讀。言上。

【一月十六日（水）】 珍田伯、疾革まり、五時過逝去の報に接し悲き叩問。

それより大臣官邸に至り、更に内大臣を訪ふ。

【一月十五日（火）】 渡辺八郎氏外数名來訪。東寺御修法、御衣奉進。

【一月十六日（水）】 MOE氏の御話。昨年来、一時休講。今回は欠振なり。

金鶏学院院議會 和田（榮次郎）、鶴見（五吉郎）、東京メッセ社、酒井（重三）氏等の語氏、赤池（重）君後れて來会。

【一月十七日（木）】 珍田伯、今朝、腦溢血の病状にて、一危篤に陥り、午後六に軽快。夜、見舞ふ。一同慰留をかけるも、如し。

【一月十八日（金）】 内大臣官邸にて、岡部（辰徳）子、小野（八千代）氏の件も一併、内諾を得たり。侍従長後任につきても意見を承はる。大臣の意見も同様。愚見は大差なきは仕合なり。

にて総理以下参拜。

九月三日（金） 草生少将を訪ふ。

四時半、木内來訪。風世上につき車見を述べおけり。

總川君を招き晚餐を共にす。

夜、安岡君來訪。

九月四日（土）

鈴木空太郎君來訪（大藏省嘱託）。中央官廳建築委員會の用務にて來訪。氏は故鈴木馬左也（第三代住吉總奉行）氏の長子なり。

院展、南展の招待日にて行を觀。院展にて大觀、古徑（八木吉徳）、手鏡（小川善徳）等先輩の出品何れも優品なり。親山（下村清山）並芝居熊（氏）の出品なども惜む。

錦羊（淺田（白）氏）佳作なりと思ふ。

颯風、東海運を襲ふ。東京も午後一時頃強風雨の度上。

九月六日（月）

栄谷君、叔父亀山氏と同伴來訪。

九月十日（金） 大倉喜七郎君邸に招かる。木内去媛、山内長人、信胤君、及余等。

九月十日（金） 中央官廳委員會、皇居陛下御帰京。

九月十一日（土）

聖王陛下、十一時頃、脈發血の御発作あり。十二月の時より軽く五月より重きか如し。十二月と五月の間は四ヶ月と二十日。五月より今日の御発作まで満四ヶ月なり。三十分位にて全く平生の通り御醒覺せられる。

午後、故寺尾（亨）元皇室第四大学法學教授、博士令夫人（幸子）の告別式。

木内を訪ひ一同晚餐を共にす。

九月十二日（日）

午後、葉山御用邸に伺候す。昨日は御発作につき天機奉伺の爲なり。

夕、牧野伯を鎌倉に訪ひ晚餐の要をうけ再び葉山に帰

70

九月七日（火） 中央官廳委員會。王公家執權特別委員會。

九月八日（水）

静岡市助役（兼芳野）來訪。昨日、市会にて満場一致小島君を選挙せし（議長の指を、由を報す。之れより小島氏を訪ひ正式に就任の承諾を得る由。市町村条例改正後、最初の市長なる由）。

昨日、怪文責、東京駅及青山明治神宮前の自動電話におありし由。一枚のにて中々劇（趣）烈なり。

王公家執權儀注の修会。

九月九日（木）

王公家執權總會を中東三ノ間に開会。終て總裁の演説あり。平沼委員の演辭あり。宮内大臣の挨拶あり。之にて帝室制度審議會に附議せられたる議案全部を終了す。

伊東總裁、平沼、富井（露堂）、板垣閣下、馬場（露一）、貴族院議員、山川（彌夫）は朝野長官、関屋（一）は参事、監事兼官長、入江、仙石、林（爾）郎、司法次官、司法、杉、大谷、栗原嘱託、渡部（留）、宮内省参事、幹事。

九月十日（金）

六時過逝にて帰京。岡部氏に開會。

九月十四日（火）

理典皇太子及紀國殿下を宮中に御招待、午餐。

夜、露院にて瑞典皇太子殿下より各国大使、總理、外相、宮相及宮中隨從者を御招きありたり。

71

組見本（75%）

全巻内容

第一巻 大正一五年／昭和元年（一九二六）～

昭和五年（一九三〇）

第二巻 昭和六年（一九三一）～

昭和一〇年（一九三五）

第三巻 昭和十一年（一九三六）～

昭和十六年（一九四一）

第四巻 昭和十七年（一九四二）～

昭和二十年（一九四六）・昭和二十五年（一九五〇）

総人名索引

ISBN978-4-336-06271-0

ISBN978-4-336-06272-7

ISBN978-4-336-06273-4

ISBN978-4-336-06274-1



（1929）1月

葉山御用邸に伺候